

【解答例】

一

敬愛する友の何気ない言葉によって、自身のことしか考  
えていなかった自分の姿に気づいて衝撃を受け、その言  
葉が彼の人間の实在性をもって自分の中に定着したから。

二

自分のことだけを考える無邪気さは、他者への感謝や配  
慮のない自己中心的なあり方であると気づき、それに無  
自覚であった自らの幼さと愚かさを悟ったということ。

三

現実の苦勞は知っていても、人間の实在としての世間に  
触れておらず、人とのつながりを実感して自分をその中  
に位置づけることができていなかったということ。

四

書物の言葉は、反芻されるうちに筆者の個性が薄れ抽象  
的意味内容だけが定着するが、生身の人間の言葉は、発  
した人間が实在性をもったまま定着し、自分とつながり  
ながら自分の一部となったことが強く感じられるから。

多彩に変化するリズムから成り立つ日常語が、たとえば七五音数律に還元できたとしても、そこから何の意図もなく七五音の定型的な組み合わせが発生することはないこと。

あらゆる内容を定型に収めなければならない短歌には、いつの時代にも、日常語の自然なリズムを断ち切って非日常の世界を創る困難があると筆者は考えているから。

短歌の定型という制約の中で韻律の効果を高めて、移民の悲しみを表現するために、茂吉は自らの知識を総動員して、古今東西の語から言葉を選んだということ。

古歌のこの表現をもし今自分が詠むならば、とてもここまで上手に詠むことはできないだろうよ。

名人が詠んだ和歌に自分が考えても理解できないところがあれば、人に尋ねてこそ歌が上手くなるのに、わからないことをそのままにしておくから。

人と議論を交わすことで、和歌の当否・巧拙を考えたり、自分と他者の受けとり方の違いを知ったりでき、歌を詠む際に重要な和歌への理解を深めることができるから。